

「寿岳文章・しづ夫妻が問いかけたもの」

甲南大学教授 中島俊郎

本日の講演は「寿岳文章・しづ夫妻が問いかけたもの」という演題であるが、その内実を翻訳、向日庵本という分野において、しづ夫人が果たした貢献を考察し、夫婦が世に問い直したものが何であったかを考えていきたい。これまで夫の文章については研究者から多くの注目を浴びてきたが、しづ夫人についてはごく一部からしか研究の対象としてなされてこなかった。よって、今回の講演ではこれまでの欠を補い、併走者としてのしづ夫人を検証の対象としてとりあげ、寿岳文章・しづ夫婦が「問いかけたもの」の本質を照射してみたいと願っている。

1. W. H. ハドソンの位置

寿岳文章夫妻の精神的な視座において中心的な位置をしめていた W. H. ハドソン (1841-1922) についてまず始めていこう。

現在も岩波文庫の一冊として版を重ねているしづ夫人が翻訳した『はるかかな国 とおい昔』は、1917年11月、コーンウォールのペンザスで入院していたハドソンが自らの幼少期の生活を書いてみようと思ひ書きはじめた自伝である。「病にかかってから二日目、小康も得たつかの間に、ゆくりなく幼年時代の追憶がよみがえり、それまで憶えたことのないほど鮮明に、はるかかなたに遠き忘れられていた過去を再びとりもどした」のであった。

共訳

文章から英語の読解の手ほどきをうけたしづ夫人は数年間をかけ翻訳し、昭和12年に出版された。しづ夫人に英語を教え、同書の意義を説いたのは夫の文章であった。つとに昭和6年、文章が同書を英語の教科書として出版していた事実はそれほど知られてはいまい。*Memories Sad and Sweet* というタイトルのもと、京都の平野書店から出版された。同書には15歳のハドソンが腸チフスに感染した恐ろしさが詳しく叙述されている。32歳の文章、妻とともに4歳の長男、潤がチフス患者となって半年間入院を余儀なくされた体験と重なり、「年があらたまり、やせ衰えたからだを杖に托し、四ヶ月ぶりに教壇に立ったとき、たまたま講読したのがチフスのくだりだったので、一言一句が身にしみ心にこたえ、よけい感銘が深かったことを、まだきのうのようにおぼえています」(『自然・文学・人間』)とは、文章自らの述懐である。その後も文章は、この教科書を増補して、*Far Away and Long Ago: A History of My Early Life* として、昭和14年に開隆堂から再び出版している。つまりこのハドソンの自伝文学は、夫妻にとって愛情おく能わざる書であったといえよう。

W. H. ハドソンの生涯

さて、寿岳夫妻をとらえて離さなかったハドソンという作家はどのような人間であったのであろうか。ハドソンの人間像と夫妻を交差させることでまた新しい視座が得られるであろう。

ウィリアム・ヘンリー・ハドソンは、1841年、アルゼンチンの首都ブエノスアイレスから離れた寒村キルメスで生まれ、草原が天空につづくようなパンパスのなかで羊飼いや、牧夫（ガウチョ）とともに暮らし、鳥と蛇をこよなく愛する自然児であった。「家の前には限りなき大草原が広がっており、裏にはラ・プラタ河に注ぐ広い流れが深く落ち込み急傾斜していた」という。鳥を収集し、その生態を詳しく記録し、発表した。ダーウィンなどから高く評価され、鳥の学名にハドソンの名前が二種類までもついている事実を想起すれば、その傾倒ぶりが理解できよう。ともあれ自然はハドソンの精神的発展の磁場であった。

1874年、32歳のときハドソンはイギリスへ移った。だが、そこには博物学者として受け容れられるような余地はもはやどこにもなかった。以後18年間、ロンドンにおいて赤貧洗うがごとの困窮生活をおくらざるをえなかった。そして、転機は1892年におとずれたのである。

『ラ・プラタの博物学者』（1893）の出版こそハドソンの文学者としての出発点であった。しづ夫人はこの著作も訳している。ラ・プラタの生活と鳥類の生態、習性をあますところなく書きしるし、ギルバート・ホワイト（1720-93）の『セルボーン博物誌』（1789）以来の自然文学に新境地を拓いたのである。「自分が記録する価値があると信じるもののみを選んだ」（「序文」）博物誌は、全二十四章からなるが、まずパンパスの豊饒を現出させ、そこに生存するあらゆる動物を描き出し、個々にまつわる珍談奇談を開陳していき、この未知の世界の住人になっているような感興に浸ることとなる。生物の単なる観察ではなく、読者はともにそれらと生きることになっていく。犀利な科学者の眼と、科学的興味をこえた文学者の情感が融合・合一された、これまでなかった世界を創出することに成功したのであった。

寿岳文章の新たな提言

夫人が亡くなった数年後、文章は妻しづが訳したハドソンの本文に沿って自らのコメントを付した『自然・文学・人間』（1973年、再版2002年）を出版したが、それは生物学者レイチェル・カーソンの環境への警告の書『沈黙の春』（1972年）への大きな共感の書にもなっている。だが、文章の本は汚染が進み、「春になっても鳥はうたわない」大地が出現してしまう恐怖を訴えようとするのを第一義にはおいていない。それは人間と自然の関係をもっと直截に語ってやまないものであった。人間は社会的存在であり、文明の生活者であるのだが、「小鳥や草木と同じく、明るい太陽の光と、きれいな空気や水、目にしみる若葉の緑なくしては、けっして健全に生きられない自然的存在である」という堅固とした人間=自然論を示唆している。

自然愛

さらに文章は「自然愛」について詳述していく。「人間は自然を征服し、支配したといわれますが、それは、人間が自然にたいして乱暴なことでもできるということではなく、自然の法則を発見し、自然の心をつかんで、自然の道理にしたがい、自然の一部を作りかえることができるようになったということです」と議論の大前提を語り、「このかけがえのない地球の自然の健在を前提に、人類の文明は発達してきたのですし、自然の脅威を克服し、自然にたいしてより自由となるなかで、自然を恐れるよりは、心ゆたかに自然を愛することができるようになったのです。自然を愛することは、趣味やアクセサリではなく、詩人だけがもつ心情でもありません。人間を愛し、人間らしく生きることに望みをもつすべての人びとに芽ばえる、それこそごく自然な感情なのです」と結論づける。

愛国者

そして文章は独自の愛国論を展開していく。文章の言う愛国者は、自然を破壊するような人間はいかに英雄であれ排除される。文章の愛国論に注目してみよう―「私の考える本当の愛国心とは、縁あって生まれ育った国の風土への深い愛着、そしてそこに住む多くの人たち、つまり人民大衆の、その日その日の平安としあわせを願う熱い心であって、絶対に戦争の起爆剤とはならず、まして、自国と他国とのあいだに目に見えぬ垣をつくりがちであった愛国心の通念とは、全く異質であり、無関係です。かけがえのない地球の陸と海と空の自然、その地球の広い底辺に住む何十億もの人民大衆への、いつも開かれている心の通り路、それが私の考えている愛国心なのです。日本についていえば、地震国は地震国なりに、太古からあった自然の景観、どこからきたにせよ、この国について狩猟や農耕にいそしみ、中央集権的な国家体制に組み入れられてからのちも、いのちをつなぐために黙々とそれぞれの労働に従事してきた名もない人民大衆。この自然と人民の大きな存在を、どんなときにも忘れず、自然と人民の立場に身を置いて、どうすればこの二つの基本的な存在が保全されるか、そのことへの深いいつくしみ。それをおいてほかに愛国心はありませんし、またあってはなりません。愛国とは、ゆがめられやすい国の体制を守ることでなく、国の自然と人民を守ることなのです」(『自然・文学・人間』)。じつに明快な愛国=自然論ではないか。

自伝文学

最後に『はるかな国 とおい昔』が何ゆえに傑作となっているのか。それはふたつの文学ジャンルのみごとな混淆にあった。英文学者、寿岳文章はその「奥義」を明かしている。

「自叙伝が文学として成功するには、主観が勝ちすぎても、客観的になりすぎてもいけません。主観が勝ちすぎると、自分におぼれて形がくずれ、読者とつながる糸が切れてしまうでしょう。逆に、客観的になりすぎると、その人ならではの滋味が失われ、報告や記録でしかなくなってしまいます。作者の個性がいつもあざやかな焦点に位置し、しかも作者をとりまく客観的なできごとも、ちゃんとレンズの中に収まっている。これが、自叙伝文学の成功する秘訣です。柔軟な心のもちぬしで、多様と調和にいつでも適応できたハドソンは、自叙伝を書くのに、うってつけの資格をそなえていました。わが心のかげを追う、ゆたかな感受性にめぐまれていながら、同時に、外部の世界へ、ゆきとどいた観察をくだすことができました。」

翻訳者としてのしづ夫人の資質をここで考えざるをえない。昭和初年、岩波書店から出した創作集『朝』はみごとな自叙伝であった。名作が名訳者をえたゆえである。

訳文の検討

では、次にここで一步踏み込んで名訳の秘密を解き明かしていこう。翻訳は訳文以外には何もなく文章がすべてである。つまり表現につきる。ハドソンの英語原文を示し、しづ夫人の訳文を次において検討してみる。

“Among our old or ancient trees the peach was the favourite of the whole house on account of the fruit it gave us in February and March, also later, in April and May, when what we called our winter peach ripened. Peach, quince, and cherry were the

three favourite fruit trees in the colonial times, and all three were found in some of the quintas or orchards of the old estancia houses. We had a score of quince trees, with thick gnarled trunks and old twisted branches like rams' horns, but the peach trees numbered about four to five hundred and grew well apart from one another, and were certainly the largest I have ever seen. Their size was equal to that of the oldest and largest cherry trees one sees in certain favoured spots in Southern England, where they grow not in close formation but wide apart with ample room for the branches to spread on all sides.”

[老木古木の中でとりわけ桃の木は、二月三月いやもっと遅く、四月五月、私たちが冬桃と呼んでいるのが熟するころに、果実が食べられるので、一家中の気に入りになっていました。桃とマルメロとオウトウは、植民時代での愛好果樹の三幅対で、三つながら皆、古い牧農場の果樹園などによく見いだされました。節くれだった幹に、雄羊の角のように曲がりくねった枝のマルメロが、家にも二十本ばかりありましたけれど、桃の木は四五百本もあって、一本ずつゆったり間隔をあけ、思いきり成長していました。確かに私が見た木のうちで、一番大きかったです。その大きさは、南部イングランドのよくこえた土地のどこかで、所狭しと茂り合わぬよう、四方へ十分枝をのばせるだけの余地を、たっぷり取って生えている、あの古い大きなオウトウの木に相当しておりました。]

この訳文で気がつくのは漢字と平仮名のみごとなバランスである。ふつう「です、ます」調は単純にながれて平板になり、冗長になるものだが、漢語（「三幅対」など）の絶妙な配置で、その弊を逃れている。凡百の翻訳者ではこうしたバランスを制御できない。結果、文はじつに読みやすく脳裏にとどまり、視覚的な喚起力にとむ訳文ができあがったのである。

次に作品の終結部に注目して訳者の妙技をさらに検討しておこう。

“Only I know that mine is an exceptional case, that the visible world is to me more beautiful and interesting than to most persons, that the delight I experienced in my communings with Nature did not pass away, leaving nothing but a recollection of vanished happiness to intensify a present pain. The happiness was never lost, but owing to that faculty I have spoken of, had a cumulative effect on the mind and was mine again, so that in my worst times, when I was compelled to exist shut out from Nature in London for long periods, sick and poor and friendless, I could yet always feel that it was infinitely better to be than not to be.”

[ただ私は、私の場合が、例外的なものであること、目に見えるこの現実世界は、世の常の人びとにまして、私にはもっと興味多いものに見えること、自然との交わりにおいて、私が経験した喜びは、あとかたもなくかき消え、ただ、はかない幸福の思い出だけを残し、現在の苦痛を、いっそう激しくさせるものではないこと、をよく知っています。自然との交わりがもたらす幸福は、決して失わ

れるのではなく、私がお話しした、あの機能のおかげで、私の心に及ぼす力を、だんだんと増し加え、再び私のものとなるのでした。だから、長い長い間、自然との交わりを断たれて、ロンドンに住み、貧しく、友もなく、病気がちの日々を送らねばならなかった私の最悪の時代でさえ、なお、生きていないよりは、生きているほうが、ずっとずっと、はるかによいと、私は、いつも感じる事ができたのです。]

ハドソン独特のアニミズムともいえる宗教にも似た境地が開陳され、この名作が締めくくられる。自然は人間の精神を快癒させる力をもつ。この作品がエコロジー文学の傑作に数えられるゆえんであるが、訳文の最後に訳者の真骨頂が表されている。「生きていないよりは、生きているほうが、ずっとずっと、はるかによいと、私はいつも感じる事ができたのです」という、あえて平仮名を過多にした訳文は、平明で口ずさむようなリズムに富み、『はるかな国　とおい昔』というタイトルそのものが織り込まれていて、読者に忘れがたい印象と記憶をもたらすのである。訳者にこの人あり、とでも言えようか。

母と娘

長女、章子はそうした母の臨終を描いた冷静でいて感動的な一文を残している。母の死を前にしてできるだけ客観的に記述しようとする抑制のとれた文体は逆に真情を強く訴えかけてくる。母であるしづに「ね、母さん、母さんの人生で何が一番よかった？」と訊ねると、意識がとぎれるなかで、はっきりと応えが帰ってきた—「パパさんと一緒になったこと、それが母の人生での最大のよろこび。父もうるんだ目で母を見やっている。母の穏やかな表情。やがては永遠の別れをせねばならぬ人との、それは最後の至福のひとつときであった。老いて、死んでゆくことの意味のときあかしがそこにあった。人は生まれ、そして死んでゆく。考えようによっては、死ぬ為に生まれてくるのかとさえ思われるほど、人生とははかないものだ。だが、そのはかなさをこのうえない光輝で染めあげることが人ではできる。ひとりの男とひとりの女の出会いのために人生があることもあると母は語ったのだ」(「忘れえぬ母の死」)。

人間がおくる人生というものをしづ夫人は、娘に対して集約した形で示した人物であったようだ。

「それほどえらかった人ではなかろう。しかし、一心に生きた人であった。その誠実さが後に残された者たちの思いを一そうかきたてる。私はやはり、母から、生きるとはどういうことなのかをおそわりつづけてきたような気がする。ささやかな人生にはちがいないが、そのささやかさの中に人はどれだけのものをこめることができるだろうか。母の一生はそのことを語ってくれるように思う」(「母のおくりもの」)。

「一心に生きた」、「誠実さ」を重ねた人生であったが、しかもとりたてて語るほどの一生ではなかったが、その「ささやかな人生」こそ大正、昭和を確実に生き抜いた日本人女性のありのままの姿ではなかったか。

今日では向日といえは桜を想起するが、どうやら桜は当初から向日の町にあったようではなかった。

「父と母が若い時分ががんばって建て、今なお私が父とともに住みつづけているその家のある住宅地は、昭和初期にはにせアカシアの並木であった。生命力の強い木で、どこの庭にもトゲのあるかなり荒々しいものがだんだん増えてきたので、住民は恐れをなして並木は桜に代わった。しかし、小学四年生だった私は、新しい家にひっこしてきて、まず並木のその木々に心ひかれていた。ちょうど白い花房が枝々に見られるころだった」(「母の病跡」)。

「にせアカシア」から「桜」への転換は、何やら寿岳家の歩みを樹木で表しているかのようである。

2. 協働の美一向日庵の本

文章は全力を傾けてつくり出した私家版の向日庵本に「茶の実」を象徴として刻印した。それは家の紋という以上に向日という土地との結びつきを表そうとしたものであった。「茶の実」は、家の花と同時に向日への愛を示すものである。「茶は私の家にとりわけ深い関係ができていた。私版本を度々出していた私の父は、自分の家の橘、母の家の桐とは別に、何か新たに寿岳の家の人生を象徴するような紋をもう一つえらびたいと思っていた。京洛の地にとりわけ関係深い植物。そして昭和八年に両親が居を定めた向日町のあたりにも、農家の庭先に大てい茶の木が見られた。こんもりして、場所も取らず品のある灌木。新しい我が家の庭にも、中心の松の木下に一株の茶の木が植えられた。その茶のふっくらした実が、日本の紋所の一つに採用されている美しさを父はよしとして自分たちの文章の活動のシンボルに借りてきた。いわば家花である」(寿岳章子「家の花」)。

向日庵本の美しさ

今日でもなお書物工芸の世界で高い評価をえている向日庵本は、デザインとか本の材料である和紙の美しさを超えて、二人の人間の協働作業から生まれた結晶であることが理解されてくる。だから、表面的な「本の美しさ」ばかりにとらわれてはいけぬ。

「そして父の仕事は、客観的に見てすぐれたものであることは、内輪ぼめのそしりを受けることなく多くの人に認められてもらえるだろうが、向日庵本の特色は、その個性ある美しさという結果論に終始するだけではない。それこそ、内部の人間の私が何かを述べることの意味として声を大に語っておきたいのは、それが寿岳文章、しづの二人がいかに生きたかということと深くかかわっているという点にある。」

向日庵本の真の美しさは、人間の親和に求められるべきなのである。

夫人の貢献

そして愛書家や研究者は向日庵本の本質が文章の造本意識にあるようによく断定しているが、それは片手落ちの見解といわねばならない。ウィリアム・ブレイクのように、彩色をほどこしていたのは、妻しづが手ずから施していたのである。この事実はけっして看過してはならない。じつに重要な現場を伝える報告がある。

「向日町に移ってからの両親の活動ぶりはすごかった。チフス罹患騒動ですっからかんになり

ながら建てた家の借金がえし、親戚や実家の面倒見、母のよく言っていたことばであったが『ほんとにどうなるかと思った』ようなすさまじくさえある仕事ぶりであった。父の八面六臂ぶりもさることながら、私は母のはたらきぶりを評価せずにおれない。かなり膨大な家事、そしてその時かなり身を入れていた翻訳の仕事、そしていよいよ脂の乗ってきた私版の仕事。学校から帰ってきた私の目に映る母の姿は、しばしば次のようなものであった。

鏡台と、衣桁と、本箱と机以外には何もない簡素きわまる六畳の母の居間。しかし窓外の緑は濃く、夏は愛らしいさるすべりの紅い小花がちりちり揺れ、冬には八重の班入りの椿の花がぼったりと重い。その窓に向かった机の上で、母はブレイクの『無明の歌』や『セルの書』の彩飾にふけていた。机上には水彩のパレット、細い細いたくさんの筆。原本はイルミネイテッド・プリンティングとやらで、いささかねっとりしてはいるが、ミュアのレリーフ・エッチングにたよって彩飾してゆく母のいろどりは日本の華奢な女人の水彩にふさわしく、淡くさわやかであった。そっと覗けば、そこにはかわいらしい羊や、五彩にきらめく夜明けの空などがあった。実に美しくまとめられていた。」(寿岳章子『永遠の水汲むわが母』)

この夫人が奏でていた「細密の手わざ」を技巧的な面でしか評価できない人は、向日庵本と無縁であると言わねばならないであろう。ブレイクは詩と彩色を一身でこなしたが、もっと深い意味での「画文共鳴」の境地が向日庵本にはあった。しかもそれは二人のつつまじやかな協働から生まれていたのである—「母の手彩飾の絵の横には父が心をこめて訳したブレイクのよきことば。その美しい仕上がりは、おそらくは夫婦が心をあわせて生きぬいていることのあかしでもあった。」

『紙漉村旅日記』の意義

数ある向日庵本のなかから何か一冊を選べと問われると、私は躊躇なく『紙漉村旅日記』を選びたい。滅びゆく日本古来の伝統と向かいあい、救うべく手をさしのべるのだが、それは高所からの物言いではなく、ともに慟哭し、生活者の目線でもって追究し、最期の息を看取ろうとする試みでもあった。

「向日庵本の最後は『紙漉村旅日記』である。あの悲惨きわまる十五年戦争の末期によくもこんな本が出たと思わずにはおれない。しかも、戦後ではもはや和紙生産の状況の激変でとてもあれだけのものは出来なかったであろう。材料をそろえ、印刷、製本、箱、万般の心くばり、職人さんとの連絡、戦火はげしい中での父の奔走も言語を絶する苦労であったろう。父は、和紙の世界に対する愛を、この本に凝縮した。装幀には白石の紙布、箱には油桐紙、内容は、妻と二人で日本中を歩きまわって得た紙漉き調査の記録。本文の用紙は富山八尾の雪晒し本高熊と佐賀の傘紙。もっとも美しく強く印刷の出来栄もよかった。全国から集められたさまざまの紙を、父は小さく切って、洋服箱をしきり、その中に種別に入れていった。母は病のせいでむくみがちな顔を蒼白にしながら、細い手先で絶対に間違いは許されないという要求に応じつつ正確に本文に貼りつけていった。虫くいをさけるため、貼付の糊は、装潢の名門、岡墨光堂に作ってもらったこんにゃく糊である。当時私は東北大に行っていた。冬休など帰省してみると、母がまっさおな顔にらんと輝く目を据え、全く火の気のない北向き三畳のへやで、その仕事をしているのであった。見ていてこっちの息がつまるきびしさであった。しかも、いい

かげんにしたらなどは口が裂けても言えぬ一途の打ちこみぶりが母に一種の後光を作っていた。向日庵本は、こうしてまさしくある夫婦がいかに生きたかの検証者となった。長い間そばでみつづけた子から見て、私はそれを稀有のわざと思っている。」

戦後よく指摘された「日本回帰」というような言葉でもって表現しつくせないほどの内実が本書からはにじみでている。戦後を生き歩くことになる日本人の原動力が紙漉者に認めることができよう。文章夫妻は生きる指針として、「生活」を基準にしたが、日本人の生活が本書にはことごとく封じ込められている。そして長女が指摘している意味で、向日庵本は、「ある夫婦がいかに生きたかの検証者」そのものである。

人生という織物

寿岳家が織りなした文化の波紋が家庭の生活を基調としていると指摘したのは鶴見俊輔であったが、その家庭の中心に核として存在していたのは、まぎれもなく妻であり母としての「しづ」であった。「私の家の特色は、時にはどんなにさわいでにぎやかであっても、それが無節操とか放漫とか、頹廢とかに結びつかなかった。健康、信頼、理想、そんな世界への志がどこかに一種の倍音のようにある家庭で、ぴしっとした雰囲気があるようであった。それはすべて母が織りなした人生の織物の基調であった」。—その女性は小さな身体であったが、大きな人間であった。

3. 寿岳夫妻が問いかけたもの

『寿岳文章・しづ著作集』の第2巻は『ある夫婦の記録』と題され、夫婦でつちかってきた人生、生活の記録となっていて、夫婦という複数の個がどのような問題を対象に検討してきたかが、じつに明瞭にその在り方が示唆されている。この巻に夫妻の「年譜」がおかれている構成からみても、本著作集全6巻の中心を占めているのがわかる。よって夫妻の「意見」がよく理解できるように、潤色をまじえずにこの巻からの引用によって、文章夫妻の姿を浮きあがらせてみたい。

「夫と妻の公開状」

まず、「夫と妻の公開状」からはじめてみよう。

「最近私たち夫婦が出したリレー随筆集を読んで、評論家の細川忠雄氏は、私たちを「自由に読み、自由に考え、自由に語る——自由人夫婦」と評されたが、まさしくその通りである。私たちは、どのような世俗の権威にも屈せず、どのような固定観念にもとらわれず、この目で、この心で、ありのままにものをとらえ、ものを見ようと努力してきた。恐怖や飢餓からの自由にしても、思想や言論の自由にしても、この努力なしには得られないだろう。」

自由というものが与えられるものではなく、熾烈な葛藤から不断の努力により初めて獲得できるものだと理解されてくる。

ふたりの出発

では、文章夫妻はどこから出発したのであろうか—「私たちの場合、純粋に思いつめた恋愛が序曲であり、その序曲はきわめて自然に、結婚へと導入されていった。お互いに相手の誠実を見ぬい

ていたから、私たちの決意をゆさぶる障害はなかったし、たとえあったとしても、私たちは動揺しなかっただろう。誰もが私たちの純粹さを祝福してくれた。だから私たちは、とにかく雑音がまじりがちな世間なみの結婚式を挙げず、婚姻の事実を告げる簡単な通知を近親や友人に送っただけで、二人きりの家庭を作った。」そしてその結婚は美しい言葉で力強く語られている—「愛は焦点を求めて集中する。外へ放散せず、内へ凝縮する。そして真の自由は、人の目に不自由と見えるものからでさえ、かち得られるのではあるまいか」、と。

でも、結婚は全く合い知らぬ対象が融和されていく過程でもある。だから未知の配偶者がどのような人間であるのか、もっとも関心が注がれるゆえんである。文章はこのような悩みを胚胎していたのであった—「封建制の強い田舎の、しかも結婚を本質的に不自然とする仏寺に生まれ育った私には、自分では相当に反省したつもりでも、知らぬまに人間らしさを疎外する一種のコンプレックスが残存していたかも、あるいは今なお残存しているかもしれない。妻はそれをどう受けとめ、どう対処していたか、彼女から私が聞きたいのは、まずそれである」という疑問を発している。

強靱な精神

それに対して妻は、「すでに夫が書きましたとおり、私たちは誰にもたよらない自主独立を、結婚生活の第一歩から実行しておりました。これを貫き通すには、強靱な精神と、経済面では幾らかの、少なくとも二、三年の生活費の用意が必要でしょう。職場で抵抗しなければならぬゆがんだことや、がまんのならない事件が発生したとき、多くの人が家族や生活のためにくじけてしまう話をよく聞きます。私は夫に、できればそうしたみじめな苦悩をなめさせたくないと思い通してきました」といった、配偶者を支える「強靱な精神」と生活に資する経済力を自らのなかで用意していたのである。

自然の治癒力

とにかく闇の中で青春の彷徨をくりかえす文章には出口がなかった—「父兄とはなんのつながりもなく、糸の切れた風船のように、孤独の空をさまよう私の青春時代は暗かった」が、そうした苦悩の治癒力となったのは自然であった。「それをともかくもくぐりぬけ、日のあたる場所へ定着させ、恋愛から結婚へと私をひとすじに引っぱっていった動力は何であっただろうか。いま思いかえしてみると、それはどうやら、私をはぐくみ育ててくれたいなかの自然、松や雑木のなだらかな山にかこまれた故郷の村であったような気がする」という言葉は、自己の精神的な展開を歌ったワーズワスの『序曲』の詩句といみじくも重なってくる—「その日ざしは暖かく、いろんな種類の小鳥が枝から枝へ飛びうつり、楽しそうに木の実をついばんでいた。その日もひまさえあれば山の日だまりに来て、私は心の傷をいやした。イギリスの詩人ワーズワスが、自己形成の最も大きな原動力を、幼少時の故郷の山村の自然に求めているのに、私は心から共鳴する。自然の景観から全く絶縁された都市の底辺によどむ気の毒な環境の青少年でも、空は澄み、日はうららかな自然のふところへ自由に飛びこめるなら、非行化への傾きの幾分かは是正されるのではあるまいか。現実はきびしく、このような願いは白昼夢にすぎないだろうけれど、私は自分自身の少年時代をふりかえってそう思うのである」。文章の自然への傾注はみずからの不遇な生い立ちから発していたのである。

どんためのおしづ

閑話休題。ここで話題は一転、しづ夫人の経済観に言及されていく—「今でこそ私は彼女を『どんためのおしづ』などとからかうが、平素、不時二段がまえの、彼女の不屈の意志力があつたれば

こそ、私は研究に必要な書物をおしみなく求めることができ、また壮年期、某百貨店の食堂管理の不備が原因で、私の一家を襲い、妻をあの世へ送る寸前まで追いこんだチフス禍を、くぐりぬけることもできた。数ヵ月にわたって、入院中の妻と私と子どもの三人に、五人の看護婦がつき、留守は家政婦がきりもりした。しかもその翌々年、私たちは、日あたりのよい現在の住所に、土地を求め、新しく家を建てたのである。」そして、ここに初めて文章夫妻と向日の町との必然的な出会いが生まれるのである。

戦争と平和

こうした夫妻はどのような生き方を選択していったのであろうか—「何よりも平和を優先させ、自由に生きることを願う私は、当然、多元主義の立場をとる。獅子と牛を同一のおきてで律することはできない。悪でないかぎり、各人にはそれぞれの考え方や生き方が許されなければならない。その意味で、妻も私も、また二人のこどもも、それぞれのパーソナリティを發揮する、完全に自主独立の自由人である。そして少しもお互いの間はぎくしゃくしない。」ここに市民から提言された平和論の要諦がある。個人という個を深く尊重し、複眼的に微視と巨視を自在に駆使し自由という独立したポジションを得る。自由はみずから掴み取るものだという姿勢も鮮明である。

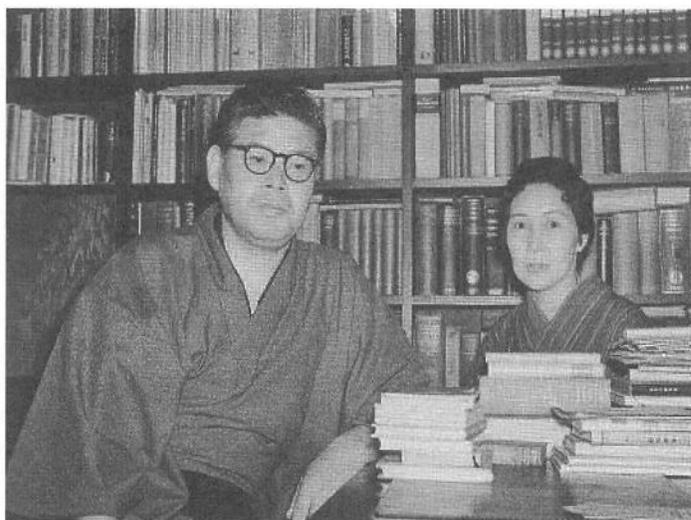
そしてこの対話は、あくまでも社会と家庭は不即不離の関係にあり、身近な家庭をいたずらに尊重するのは、偏重した考えであると糾弾される—「にもかかわらず、私たちが『似たもの夫婦』の印象を与えるとすれば、それは私たちの思考や行動が、同じ核を中軸として同心円的にひろがってゆくからだと思う。自分ひとりさえ、自分たち夫婦さえ、あるいは自分たちの一家さえ無事平穩に暮らせたなら、社会にどのような問題があろうと、人民大衆がどんなに苦しんでいようと構わない、あるいはやむをえないとする閉鎖的な態度は、私も妻も我慢できないのである。学者と呼ばれる人たちには、こういう独善主義者がわりに多いのではあるまいか。」個は全体があって活かされるものであり、けっしてその逆ではないことが鮮明に打ち出されていて、寿岳家の「家庭哲学」が生半かな脆弱なものではないことを示唆している。

現在、憲法改正論議がかまびすしいが、文章の透徹した提言を、一家を挙げて提唱する意義を私たちはどのように聴くであろうか。

「戦後に制定・実施された日本の憲法は、国際紛争の解決手段としての武力による威嚇や武力の行使を、永久に捨てたことにおいて、今まで人類が作ったどの憲法よりも崇高であり、この憲法の完全な保持意外に、日本が過去に犯した侵略戦争のつぐないはないと私は信ずる。また基本的人権を、侵すことのできない永久の権利として現在および将来の国民に与え、信教や一切の表現の自由を、だれにも保障している点において、明治憲法とは対蹠的に、人民大衆が考慮されていると私は信ずる。この憲法になんのかのといちゃもんをつけ、改正の名において煙硝くさい戦力復帰の線まで後退させようとする動きに対し、学問を本命とする私たちが、一家ぐるみあらゆる機会に危険信号をあげるのも、社会に目を向けずにはおられない親子として当然であろう。」

「いちゃもん」という方言には微苦笑を誘われてしまうが、事は笑い事ではすまされない。背筋を伸ばして拝聴すべきことなのだから。どうやら寿岳家が発した数多くのメッセージの根底には、戦

争はどのような理由があれども、ぜったいに忌避しなければならないという「平和論」があるようだ。危機が迫れば、後世はこの視座を幾度も検証することになるであろうと私は信じる。



壽岳文章・しづ夫妻 文章が『セルボーン博物誌』を訳した頃
(壽岳和子『地上の星座』より)